



## 高知県から得られたハゼ科 7 種の記録

岡村恭平<sup>1</sup>・山上竜生<sup>1</sup>・井上裕太<sup>2</sup>・野村彩恵<sup>3</sup>・遠藤広光<sup>1</sup>

## Author &amp; Article Info

<sup>1</sup> 高知大学理工学部海洋生物学研究室（高知市）  
 KO: b22m6g30@s.kochi-u.ac.jp (corresponding author)  
 RY: b23m6g23@s.kochi-u.ac.jp  
 HE: endoh@kochi-u.ac.jp  
<sup>2</sup> 海洋プランニング株式会社（福岡市）  
 yuta0423k@gmail.com  
<sup>3</sup> トンボと自然を考える会（四万十市）  
 tombo@gakuyukan.com

Received 17 August 2023  
 Revised 24 August 2023  
 Accepted 24 August 2023  
 Published 28 August 2023  
 DOI 10.34583/ichthy.35.0\_20

Kyohei Okamura, Ryusei Yamagami, Yuta Inoue, Sae Nomura and Hiromitsu Endo. 2023. Records of seven species of the family Gobiidae from Kochi Prefecture, Shikoku, Japan. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 35: 20–27.

## Abstract

Seven species of the Gobiidae, *Bathygobius petrophilus* (Bleeker, 1853), *Favonigobius* sp. sensu Matsui et al. (2014), *Luciogobius* sp. 7 sensu Shibukawa et al. (2019), *Luciogobius* sp. 16 sensu Shibukawa et al. (2019), *Oxyurichthys lonchotus* (Jenkins, 1903), *Oxyurichthys takagi* Pezold, 1998, and *Trypauchenopsis intermedia* Volz, 1903, were newly recorded on the basis of specimens collected from Kochi Prefecture, Japan. Of these, *Luciogobius* sp. 7 and *Oxyurichthys takagi* represent the southernmost and northernmost specimen-based records for the species, respectively.

ハゼ科は魚類最大の種数を誇る多様性に富んだ分類群であり、多くの種で左右の腹鰭鰭膜が相合し吸盤状となる（左右が分離する種でも、多くは退縮的な癒合膜をもつ）、体の側線管が未発達、および鰓条骨数が5といった特徴などから定義される（松井, 2018; 瀬能ほか, 2021）。高知県におけるハゼ科を含む魚類相の記録としては、蒲原（1931, 1950, 1958, 1960, 1962）、Kamohara（1957, 1958, 1964）、落合ほか（1980）、平田ほか（1996）、中坊ほか（2001）、高知県レッドデータブック〔動物編〕編集委員会（2002）、野川ほか（2003）、三宅ほか（2006）、岡本・遠藤（2007）、大塚ほか（2010）、木村ほか（2013）、片山ほか（2017）、および井上ほか（2021）などが挙げられる。そ

れらには、ボウズハゼ *Sicyopterus japonicus* (Tanaka, 1909)、イドミミズハゼ *Luciogobius pallidus* Regan, 1940、イザヨイベンケイハゼ *Priolepis nocturna* (Smith, 1957)、キツネメネジリンボウ *Stonogobiops pentafasciatus* Iwata and Hirata, 1994、ズグロダテハゼ *Amblyeleotris melanocephala* Aonuma et al., 2000、サザレハゼ *Grallenia arenicola* Shibukawa and Iwata, 2007、キオビチヒロハゼ *Obliquogobius yamadai* Shibukawa and Aonuma, 2007、サクライレズミハゼ *Priolepis winterbottomi* Nogawa and Endo, 2007、クロエリカノコハゼ *Vanderhorstia hiramatsui* Iwata et al., 2007、キザクラハゼ *Vanderhorstia kizakura* Iwata et al., 2007、ナノハナフブキハゼ *Vanderhorstia rapa* Iwata et al., 2007、ナガシメベニハゼ *Trimma kudo* Suzuki and Senou, 2008、カシワベニハゼ *Trimma matsunoi* Suzuki et al., 2012、ホウセキイレズミハゼ *Priolepis duostella* Koeda et al., 2021、およびシラヌイミミズハゼ *Luciogobius punctilineatus* Koreeda and Motomura, 2022 のように、高知県産の標本を用いて命名された種や、マツゲハゼ *Oxyurichthys ophthalmonema* (Bleeker, 1856) とホオベニオトヒメハゼ *Vanderhorstia puncticeps* (Deng and Xiong in Xu et al., 1980) のように、日本初記録として報告された種も含まれる（Kamohara, 1957; Iwata et al., 2007; 片山ほか, 2017）。一方で、殊に砂泥・砂礫中に生息する種の全容は、いまだ明らかにされていない。

今回、著者らが行っている高知県の沿岸や河川での魚類相調査、および高知大学理工学部海洋生物学研究室所蔵標本の調査の結果、新たにシジミハゼ *Bathygobius petrophilus* (Bleeker, 1853)、ヒメハゼ属の一種 *Favonigobius* sp. sensu Matsui et al. (2014)、ハウチワヤリミミズハゼ *Luciogobius* sp. 7 sensu Shibukawa et al. (2019)、ナガミミズハゼ種群未同定種 2 *Luciogobius* sp. 16 sensu Shibukawa et al. (2019)、ミナミサルハゼ *Oxyurichthys lonchotus* (Jenkins, 1903)、シマサルハゼ *Oxyurichthys takagi* Pezold, 1998、マバラヒゲワラスボ *Trypauchenopsis intermedia* Volz, 1903 の7種について、標本に基づく高知県での分布が確認されたため報告する。

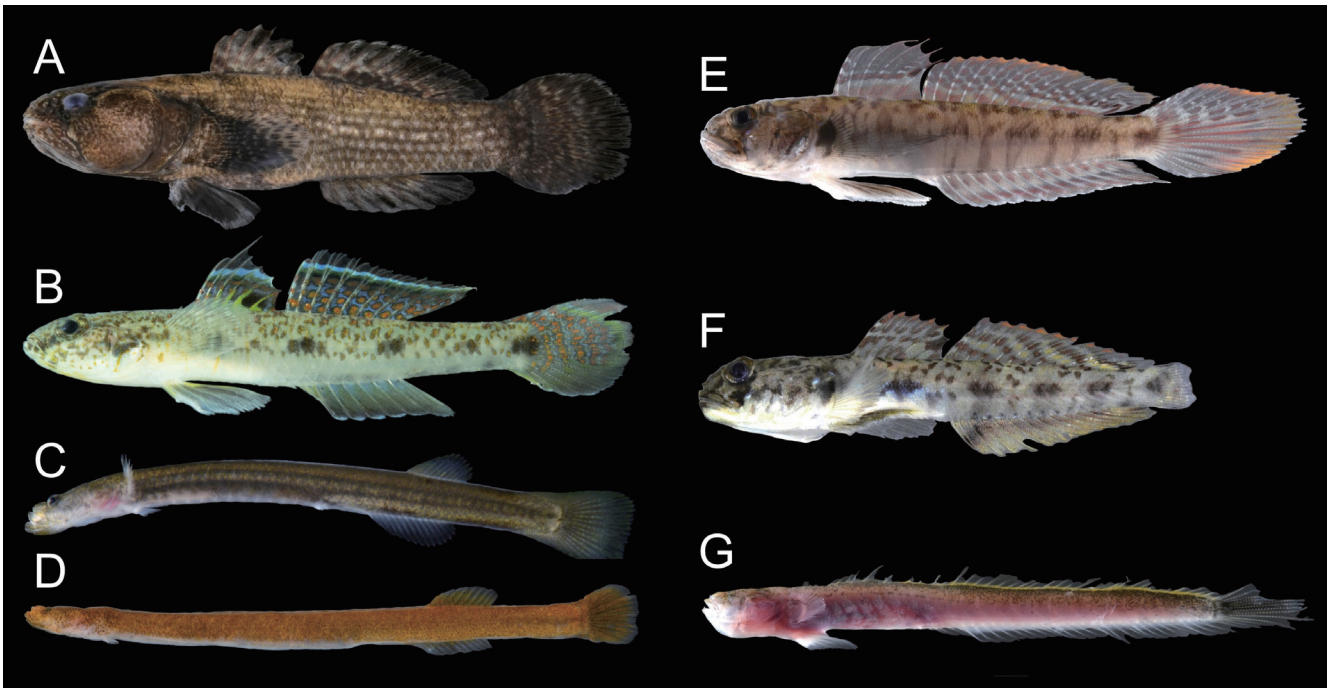


Fig. 1. Fresh specimens of gobiids from Kochi Prefecture, Japan. A: *Bathygobius petrophilus*, BSKU 121364, 50.9 mm SL; B: *Favonigobius* sp. sensu Matsui et al. (2014), BSKU 133818, 33.8 mm SL; C: *Luciogobius* sp. 7 sensu Shibukawa et al. (2019), BSKU 129482, 17.4 mm SL; D: *Luciogobius* sp. 16 sensu Shibukawa et al. (2019), BSKU 133714, 41.9 mm SL; E: *Oxyurichthys lonchotus*, BSKU 134198, 36.2 mm SL; F: *Oxyurichthys takagi*, BSKU 134178, 18.6 mm SL; G: *Trypauchenopsis intermedia*, BSKU 134199, 39.9 mm SL.

## 材料と方法

標本の計数・計測方法は中坊・中山 (2013) に、ハゼ垂目の頭部感覚器官の名称は明仁ほか (2013) に、各種の学名と掲載順は本村 (2023) に、それぞれしたがった。標準体長は体長または SL と略記した。計測はデジタルノギスを用いて 0.01 mm 単位まで行い、小数第 2 位を四捨五入した。担鰭骨や脊椎骨といった内部形態の観察には、軟 X 線写真を用いた。標本の作製、登録、撮影、および固定方法は、本村 (2009) と同様の方法で行った。BSKU は高知大学理工学部海洋生物学研究室、KPM は神奈川県立生命の星・地球博物館の機関略号である。なお、同博物館の写真資料番号 (KPM-NR) は、電子台帳上は 0 が付加された 7 桁の数字であるが、ここでは本質的な有効数字で示した。

### *Bathygobius petrophilus* (Bleeker, 1853)

#### シジミハゼ (Fig. 1A)

**標本** BSKU 121364, 体長 50.9 mm, 仁淀川河口沖, 2017 年 1 月 12 日, シラスパッチ網漁, 内藤大河・佐藤真央。

**同定** 本標本は、前鼻孔に皮弁がない、感覚管の開孔 H' と K' が互いに離れる、両眼間隔が広く、その幅が眼径より大きい、両眼間隔域の感覚管開孔 C(S) がない、頭部背面に横列孔器列があるという特徴が、明仁ほか (2013) が示したシジミハゼの標本と一致したため、本種に同定された。

**分布** 本邦では、伊豆諸島 (八丈島), 千葉県, 神奈川県, 静岡県, 和歌山県, 鹿児島県本土, 琉球列島 (奄美大島・与論島・沖縄島・西表島) から報告があった (工藤・山田, 2005; 明仁ほか, 2013; 鈴木, 2014; 山川ほか, 2018; 是枝ほか, 2022a)。本研究により、新たに高知県からも本種が記録された。

**採集地の環境** 本種はおもに夏季から秋季にかけて、内湾や河口の砂底に堆積した植物片などの間から得られている (工藤・山田, 2005; 明仁ほか, 2013; 鈴木, 2014; 山川ほか, 2018; 是枝ほか, 2022a)。本標本は冬季に、高知市春野漁港で水揚げされた仁淀川河口沖でのシラスパッチ網漁の混獲物から採集された。

### *Favonigobius* sp. sensu Matsui et al. (2014)

#### ヒメハゼ属の一種 (Fig. 1B)

**標本** 7 個体 (体長 30.1–36.9 mm) : BSKU 114647, 体長 36.4 mm, 須崎市浦ノ内下中山 堂ノ浦, 2014 年 6 月 13 日, タモ網, 山川 武; BSKU 132460, 体長 30.1 mm, 高知市春野町東諸木 新川川公園前, 2017 年 7 月 27 日, タモ網, 岡村恭平; BSKU 132462, 体長 33.1 mm, 須崎市浦ノ内下中山 堂ノ浦, 2017 年 7 月 23 日, タモ網, 岡村恭平; BSKU 133817, 体長 30.3 mm, BSKU 133818, 体長 33.8 mm, BSKU 133819, 体長 34.0 mm, 幡多郡大月町平山 平山川河口に隣接する船溜, 2023 年 5 月 21 日, タモ網, 太田啓佑・難波拓登; BSKU 134180, 体長 36.9 mm,

幡多郡大月町平山 平山川河口に隣接する船溜, 2023年7月17日, タモ網, 松永 翼.

**同定** 本標本は, 背鰭と臀鰭軟条数がそれぞれ8, 第1背鰭の黒斑が後方にある, 尾鰭基底部の黒色斑が丸い, 背鰭前方鱗数が7–8 (BSKU 132460, 132462は損傷が著しく計数不能) であるという特徴が, Matsui et al. (2014) や赤池 (2020) が示したヒメハゼ属の一種の標徴と一致したため, 本種に同定された.

**分布** 若狭湾, 宮崎県, 鹿児島県本土から報告があり, 宮崎県や鹿児島県本土の沿岸では広く分布することが示唆されていた (Matsui et al., 2014; 赤池, 2020; 村瀬ほか, 2021). 本研究により, 新たに高知県からも本種が記録された.

**採集地の環境** 本標本はいずれも, 河口や淡水の影響を受ける内湾の泥底から採集された. 周辺の砂底では同属のヒメハゼ *Favonigobius gymnauchen* (Bleeker, 1860) が多数観察されたが, 泥底においては多くの場合, 本種が優占種であった.

**備考** 本種は形態的特徴が同属のミナミヒメハゼ *Favonigobius reichei* (Bleeker, 1853) に類似し, さらなる分類学的調査が必要とされる (Matsui et al., 2014). 本種は従来, ミナミヒメハゼと混同されていたと考えられ, 九州以北におけるミナミヒメハゼの記録のうち, 少なくとも一部は本種に再同定される可能性が高い. 本種は採集された時期や体長, 個体数から, 高知県沿岸で再生産していると考えられる.

#### *Luciogobius* sp. 7 sensu Shibukawa et al. (2019)

##### ハウチワヤリミミズハゼ (Fig. 1C)

**標本** BSKU 129482, 体長 17.4 mm, 土佐清水市以布利, 2021年2月3日, 徒手, 井上裕太・山口 蓮・澤田尚磨・永江葉奈.

**同定** 本標本は, 臀鰭起点と肛門の距離が肛門位置での体高の半分以上, 脊椎骨数が  $17 + 24 = 41$ , 背鰭が臀鰭より後方に位置する, 背鰭の起点が臀鰭基底の前方から約  $1/3$  の位置を通る垂線付近に位置する, 背鰭総鱗条数が11, 臀鰭総鱗条数が13, 胸鰭鱗条数が13, 胸鰭上部の遊離軟条数が3, 生時の体の地色が比較的黄色味を帯びるなどの特徴が, 渋川ほか (2019) が示したヤリミミズハゼ種群の標徴と一致した. また, 胸鰭分岐軟条がない, 鰭全体が深く切れ込み, ヤツデの葉状であるという特徴が, 渋川ほか (2019) が示したハウチワヤリミミズハゼの標徴と一致したため, 本種に同定された.

**分布** これまで, 静岡県と和歌山県のみから知られていた (渋川ほか, 2019; 前田・平嶋, 2021). 本研究により, 新たに高知県からも本種が記録された. これは, 四国初か

つ分布の南限を更新する記録ともなる.

**採集地の環境** 本種は, 波当たりの強い砂礫海岸や, 防波堤の脇に堆積した砂礫間等に生息することが知られている (渋川ほか, 2019). 本標本は, 以布利川河口からやや離れた海岸で, 堆積した直径3–10 cm程度の礫中から採集された. 本種が採集された場所では, 河川の伏流水は観察されなかった.

#### *Luciogobius* sp. 16 sensu Shibukawa et al. (2019)

##### ナガミミズハゼ種群未同定種 2 (Fig. 1D)

**標本** 24個体 (体長 17.3–41.9 mm): BSKU 129371, 体長 24.6 mm, BSKU 129372, 体長 26.5 mm, BSKU 129373, 体長 21.8 mm, BSKU 129374, 体長 17.3 mm, BSKU 129375, 体長 17.8 mm, 土佐清水市以布利 以布利川河口, 2021年1月18日, 徒手, 井上裕太・溝脇一輝・山口 蓮・澤田尚磨; BSKU 129480, 体長 30.3 mm, BSKU 129483, 体長 28.7 mm, BSKU 129484, 体長 24.4 mm, BSKU 129485, 体長 18.4 mm, BSKU 129486, 体長 19.5 mm, BSKU 129487, 体長 18.4 mm, BSKU 129488, 体長 23.4 mm, BSKU 129489, 体長 22.4 mm, BSKU 129490, 体長 25.0 mm, BSKU 129491, 体長 18.1 mm, BSKU 129492, 体長 24.0 mm, BSKU 129493, 体長 23.3 mm, 土佐清水市以布利 以布利川河口, 2021年2月3日, 徒手, 井上裕太・山口 蓮・澤田尚磨・永江葉奈; BSKU 129570, 体長 32.2 mm, BSKU 129571, 体長 29.7 mm, 安芸市下山 名村川河口, 2021年2月23日, シャベル・徒手, 井上裕太; BSKU 133657, 体長 41.9 mm, BSKU 133713, 体長 40.6 mm, BSKU 133714, 体長 41.9 mm, BSKU 133715, 体長 36.8 mm, BSKU 133716, 体長 35.3 mm, 幡多郡黒潮町灘井の岬北東の細流, 2023年5月21日, シャベル, 岡村恭平・山上竜生・橘 皆希.

**同定** 本標本は, 背鰭総鱗条数が10–12 (最頻値 11), 臀鰭総鱗条数が11–13 (13), 胸鰭軟条数が9–13 (11) で胸鰭の遊離軟条をもたない (10個体は上端の1鱗条が短く遊離するが, ほとんどが痕跡的であり, 多くは長くても胸鰭第2鱗条の  $1/5$  程度, ただし BSKU 133713 は  $1/2$  程度に達する), 脊椎骨数が  $20–21 + 22–23 = 42–43$ , 背鰭担鰭骨と神経棘の関係式 (P-V) が  $24 \cdot 25$ ,  $25$ ,  $25 \cdot 26$  である (BSKU 129371, 129375, 129480, 129570, 129571, 133657, 133713, 133714, 133715 以外は計数不能) などの特徴が, 渋川ほか (2019) と是枝ほか (2022b) が示したナガミミズハゼ種群未同定種 2 の標徴と概ね一致したため, 本種に同定された.

**分布** 静岡県, 和歌山県, 愛媛県, 宮崎県, 鹿児島県本土, 大隅諸島 (屋久島), 天草諸島 (長島) から報告があった (渋川ほか, 2019; 是枝ほか, 2022b; 齊藤・難波, 2022).

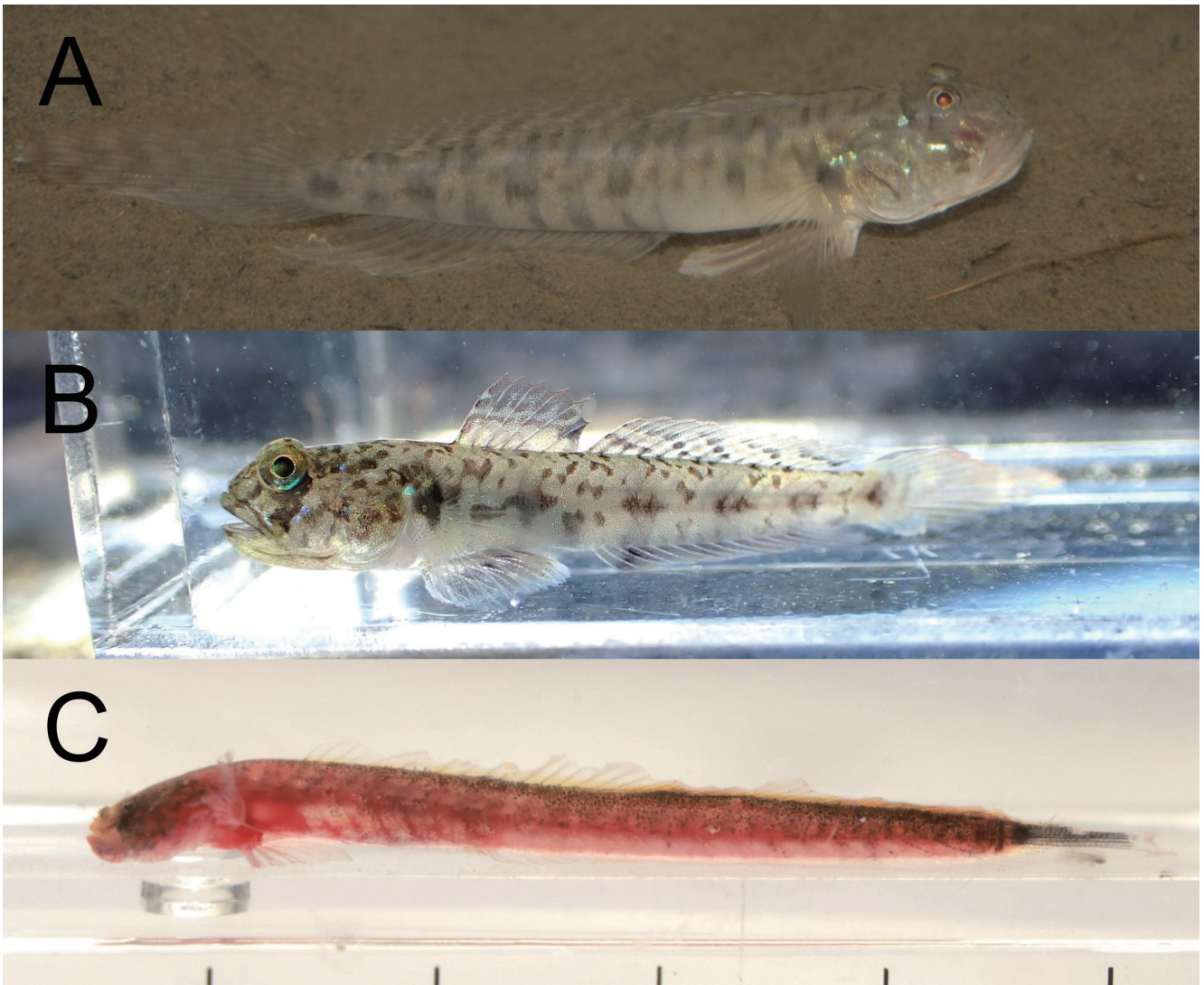


Fig. 2. Live individuals of gobiids from Kochi Prefecture, Japan. A: *Oxyurichthys lonchotus*, unregistered specimen [collected on July 24, 2010 (taken on July 26), in the Shimanto River]; B: *Oxyurichthys takagi*, BSKU 134178; C: *Trypauchenopsis intermedia*, BSKU 134199.

ただし、静岡県では1980年代後半以降の生息が確認されておらず、薩摩半島南部と屋久島からの記録は偶発的な出現の可能性が指摘されている（渋川ほか, 2019; 是枝ほか, 2022b）。本研究により、新たに高知県からも本種が記録された。

**採集地の環境** 本標本は、安芸市の名村川では河口部に散在した直径10–40 cm程度の転石下の砂礫中から、土佐清水市の以布利川では干出時の河口部に堆積した直径1–5 cmの砂礫中、またはその砂礫上にある直径10 cm程度の転石下からそれぞれ採集された。さらに、幡多郡黒潮町の井の岬北東の細流では、河口部に堆積した直径1–5 cmの砂礫中から、同属のイソミミズハゼ *Luciogobius martellii* Di Caporiacco, 1948 (BSKU 133656) と共に得られた。上記の採集地はいずれも小規模な礫床河川の河口域であり、海岸へ流れる河口部は堆積した砂礫によって川幅が狭まっていた。干潮時には砂礫中や転石下を伏流する河水が観察され、本種はその影響を受ける環境で採集された。

**備考** 渋川ほか (2019) は和歌山県産の標本について、

鮮時の体色がヒイロナガミミズハゼ *Luciogobius* sp. 14 sensu Shibukawa et al. (2019) に酷似するが、前者は頬の後部にある淡色の斜帯が目立つとした。これに対し、是枝ほか (2022b) は宮崎県と鹿児島県から得られた標本から、本種の前鰓蓋後縁付近の色彩は、ヒイロナガミミズハゼより淡い傾向を示すが、白色から淡い橙色や黄色系の色彩を呈するものまで連続的であり、頬の淡色域は傾向的な差異こそみられるものの、本種の淡色域が不明瞭な個体とヒイロナガミミズハゼの識別にはあまり有効でないことを示唆した。高知県産の標本は、生鮮写真が確認できる7個体のうち、前鰓蓋後縁の白色斜帯が明瞭であったのは2個体 (BSKU 129371, 129478) で、5個体の前鰓蓋後縁は体側よりも淡く白色の斜帯が確認できるものの黄色や茶褐色の斑紋が散在しており、淡色域が不明瞭な個体がみられる点で、是枝ほか (2022b) が用いた宮崎県および鹿児島県産の標本と類似していた。また、是枝ほか (2022b) は太平洋沿岸と東シナ海沿岸の個体群について、前者では背鰭総鰭条数が普通11–12（後者では11）、臀鰭総鰭条数が普通

13–14 (13), 胸鰭軟条数が普通 11 (12), および胸鰭は遊離軟条をほぼもたず, あっても短い (2/3 ほどの個体が遊離軟条をもつ) ことにおいて傾向的な差異が観察されたとした. そして, 東シナ海沿岸の個体群は橙色系の色彩を呈し, 2/3 ほどの個体が胸鰭に遊離軟条をもつことでヒイロナガミズハゼと似るものの, 背鰭, 臀鰭, および胸鰭の鰭条数がやや少なく, 渋川ほか (2019) が示した本種の変異幅に収まることなどから, 種内の地理的変異とした. 高知県の個体群は, 半数程度の個体が胸鰭に遊離軟条をもつという点で, 是枝ほか (2022b) が報告した太平洋沿岸と東シナ海沿岸の個体群の中間の特徴を有していた. 尾椎骨数において, 1 個体 (BSKU 133714) は是枝ほか (2022b) と渋川ほか (2019) が示したナガミズハゼ種群未同定種 2 の変異幅から外れるが, 他の形質では差異がないため, 東シナ海沿岸の個体群と同様に種内変異の範疇と考えられる.

### *Oxyurichthys lonchotus* (Jenkins, 1903)

#### ミナミサルハゼ (Figs. 1E, 2A)

**標本** 3 個体 (体長 15.7–36.2 mm): BSKU 134176, 体長 15.7 mm, BSKU 134177, 体長 19.0 mm, 幡多郡大月町平山 平山川河口に隣接する船溜, 2023 年 7 月 17 日, タモ網, 岡村恭平・松永 翼・橘 皆希; BSKU 134198, 体長 36.2 mm, 四万十市間崎 四万十川津蔵瀨水門付近, 2023 年 7 月 16 日, サデ網, 野村彩恵・平林歩子.

**同定** 本標本は, 眼上に糸状の皮弁がない, 体側後半が櫛鱗で覆われる, 胸鰭基部の黒色斑が基部上半に偏る, 尾鰭に明瞭な黒色斑がない, 体側背部の被鱗域前端が項部側面に達しない, 体側の臀鰭基底上に数本の暗色横帯がある, 尾部の横帯は細く, 体側中央の黒色斑と斑間を通る, 臀鰭は中央が白色という特徴が, 渋川ほか (2017) や瀬能ほか (2021) が示したミナミサルハゼの標徴と一致したため, 本種に同定された.

**分布** 本邦では, 小笠原群島 (父島・母島), 千葉県, 神奈川県, 静岡県, 三重県, 和歌山県, 徳島県, 宮崎県, 鹿児島県本土, 大隅諸島 (種子島・屋久島・口永良部島), 奄美群島 (奄美大島・徳之島・沖永良部島), 沖縄諸島 (沖縄島・久米島), 宮古列島 (宮古島・伊良部島), 八重山列島 (石垣島・西表島・与那国島) から報告があった (野元, 2005; 森口, 2010; 明仁ほか, 2013; 吉郷, 2014; 国土交通省四国地方整備局那賀川河川事務所, 2017; 山川ほか, 2017, 2018; 金川ほか, 2018; 村瀬ほか, 2021; 赤池ほか, 2021). 本研究により, 新たに高知県からも本種が記録された.

**採集地の環境** 本標本はいずれも, 河口や淡水の影響を受ける内湾の泥底から採集された (BSKU 134176,

134177 の採集地点はシマサルハゼの項を, BSKU 134198 の採集地点はマバラヒゲワラスボの項をそれぞれ参照).

**備考** 高知県において本種は, 2001 年 8 月 4 日に土佐清水市宗呂川で 2 個体採集されたのが最初であり (杉村光俊氏, 私信), その後も四万十川 (BSKU 134198 と同地点) から 2010 年 7 月 24 日の 1 個体 (Fig. 2A) 以降, 断続的に採集されている (高知新聞, 2010 年 7 月 25 日付; 朝日新聞, 2010 年 7 月 26 日付; 毎日新聞, 2010 年 7 月 28 日付; 野村, 私信). また, 2022 年 7 月 31 日に安芸郡東洋町甲浦の入り江で本種の写真 (KPM-NR 239096) が撮影されている (難波拓登氏, 私信). 古橋ほか (2019) は薩摩半島におけるミナミサルハゼとカマヒレマツゲハゼについて, 両種は同所的に生息するが, 採集時期が前者では 6 月から 7 月中旬であるのに対し, 後者では 7 月下旬から 11 月であることから, その出現時期の差は, 産卵期や浮遊仔魚期間などの違いであることを示唆した. 高知県においても, カマヒレマツゲハゼは 7 月から 11 月にかけて観察されたのに対し, ミナミサルハゼの確認は殆どが 7 月から 8 月と, 後者は前者より出現が夏季に偏っていた (岡村ほか, 2022; 岡村, 未発表; 野村, 私信).

### *Oxyurichthys takagi* Pezold, 1998

#### シマサルハゼ (Figs. 1F, 2B)

**標本** BSKU 134178, 体長 18.6 mm, 幡多郡大月町平山 平山川河口に隣接する船溜, 2023 年 7 月 17 日, タモ網, 岡村恭平.

**同定** 本標本は, 眼上に糸状の皮弁がない, 体側鱗がすべて円鱗, 体側背半の各鱗に明瞭な黒色点がない, 第 1 背鰭の第 1 棘条は第 4・5 棘条に比べて極端に短くはない, 第 1 背鰭の後部に顕著な黒色斑がない, 体側に 6 本の幅広い暗色横帯がある (ただし前半の 3 本は不明瞭), 尾部の横帯は太く, 体側中央の黒色斑上を通る, 臀鰭は灰色という特徴が, 渋川ほか (2017) や瀬能ほか (2021) が示したシマサルハゼの標徴と一致したため, 本種に同定された.

**分布** 本邦では, 琉球列島 (奄美大島・石垣島・西表島) から報告がある (吉郷, 2014; 瀬能ほか, 2021). 本研究により, 新たに高知県からも本種が記録された. これは, 四国初かつ分布の北限を更新する記録ともなる.

**採集地の環境** 本標本は, 小河川の河口に隣接する船溜の一角に堆積した軟泥中から得られた. その直前には, サルハゼ属魚類が巣穴と思われる海底の開口部に逃げ込む様子が観察された. 同所では同日に, 同属のカマヒレマツゲハゼ *Oxyurichthys cornutus* McCulloch and Waite, 1918 とミナミサルハゼ (前項参照) や, 同科のクロコハゼ *Drombus* sp. sensu Akihito et al. (2013) (BSKU 134179), ヒメハゼ属の一種 (同種の項参照) およびヒメハゼ (BSKU

134182)に加え、ツバメコノシロ *Polydactylus plebeius* (Broussonet, 1782) (BSKU 134183) やクロホシマンジュウダイ *Scatophagus argus* (Linnaeus, 1766) なども採集された。また、同一地点では2022年10月9日にも本種の写真 (KPM-NR 239102) が撮影されている (難波拓登氏, 私信)。なお、本標本の採集地点周辺では、2022年から著者らによる魚類を中心とした水生生物相調査が行われており、これまでに、イッセンヨウジ *Coelonotus leiaspis* (Bleeker, 1853), タニヨウジ *Microphis retzii* (Bleeker, 1856), セスジタカサゴイシモチ *Ambassis miops* Günther, 1871, オオクチュゴイ *Kuhlia rupestris* (Lacepède, 1802), オカメハゼ *Eleotris melanosoma* Bleeker, 1852, タネカワハゼ *Stenogobius* sp. sensu Akihito et al. (2013), アカボウズハゼ *Sicyopus zosterophorus* (Bleeker, 1857), ナンヨウボウズハゼ *Stiphodon percnopterygionus* Watson and Chen, 1998, オニヌマエビ *Atyopsis spinipes* (Newport, 1847), フネアマガイ *Septaria porcellana* (Linnaeus, 1758) などの南方系の通し回遊性種の出現が確認されている (岡村ほか, 2023; 岡村・斉藤, 2023; 岡村, 未発表)。

### *Trypauchenopsis intermedia* Volz, 1903

#### マバラヒゲワラスボ (Figs. 1G, 2C)

**標本** BSKU 134199, 体長 39.9 mm, 四万十市間崎四万十川津蔵淵水門付近, 2023年7月16日, サデ網, 野村彩恵・平林歩子。

**同定** 本標本は、鱗がない、頭部全体に髭がある (固定後は不明瞭)、頭部に皮摺がない、背鰭と臀鰭が尾鰭と鰭膜で連続するなどの特徴が、Shibukawa and Murdy (2012) と明仁ほか (2013) が示したヒゲワラスボの標徴と一致した。また、背鰭が6棘31軟条 (ホシドメヒゲワラスボとの重複値だが、その最頻値ではない)、臀鰭軟条数が30、胸鰭軟条数が17という特徴が、Maeda et al. (2022) が示したマバラヒゲワラスボの標徴と一致したため、本種に同定された。

**分布** 本邦において、ヒゲワラスボ *Trypauchenopsis intermedia* としての報告は、千葉県、静岡県、和歌山県、高知県、鹿児島県本土、大隅諸島 (種子島, 屋久島), 奄美群島 (奄美大島, 喜界島, 徳之島), 沖縄諸島 (沖縄島, 久米島), 宮古列島 (宮古島, 伊良部島), 八重山列島 (石垣島, 西表島) からなされているが (明仁ほか, 2013; 吉郷, 2014; 金川ほか, 2018; Fujiwara and Motomura, 2020; 古橋ほか, 2020; 是枝ほか, 2022a; 山下ほか, 2022; 國島, 2022), これらの少なくとも一部はホシドメヒゲワラスボ *Trypauchenopsis limicola* と考えられ、マバラヒゲワラスボ *Trypauchenopsis intermedia* の確かな記録は、Maeda et al. (2022) と Motomura (2023) が示した南西諸島 (種子島,

沖縄島, 石垣島) に限定される (後述)。本研究により、新たに高知県からも本種の確かな記録が得られた。

**採集地の環境** 本標本は、四万十川河口右岸の中州 (大島) との間に発達した干潟の津蔵淵水門付近の泥中から、コガネチワラスボ *Taenioides gracilis* (Valenciennes, 1837) と共に採集された。同所では、同時にツマグロスジハゼ *Acentrogobius* sp. 2 sensu Akihito et al. (2013), マハゼ *Acanthogobius flavimanus* (Temminck and Schlegel, 1845), クロコハゼ, ウロハゼ *Glossogobius olivaceus* (Temminck and Schlegel, 1845), ミナミサルハゼ (BSKU 134198 ほか2個体), およびヒメハゼなどのハゼ科魚類が得られ、過去にはノボリハゼ *Oligolepis acutipennis* (Valenciennes, 1837) やクチサケハゼ *Oligolepis stomias* (Smith, 1941) も確認されている。なお、2022年8月27日にも高知県でヒゲワラスボ属未同定種の写真 (KPM-NR 239098) が撮影されており、その採集地点は同一の干潟のやや北方である (難波拓登氏, 私信)。

**備考** 従来、*Trypauchenopsis intermedia* にはヒゲワラスボの標準和名が適用されていたが (Shibukawa and Murdy, 2012), Maeda et al. (2022) は沖縄島から得られた仔魚の形態から、邦産ヒゲワラスボには *Trypauchenopsis limicola* (Smith, 1964) が混同していたこと、標準和名の基準とされた標本にも両種が含まれていたことを明らかにし、混乱を避けるため新たに、前者にはマバラヒゲワラスボ、後者にはホシドメヒゲワラスボの標準和名を提唱した。しかし Maeda et al. (2022) は沖縄島と石垣島以外での両種の記録については言及していない。高知県にヒゲワラスボが分布するとして高知県レッドデータブック [動物編] 編集委員会 (2002) と明仁ほか (2013) は、いずれも高知県産標本の写真や形態的特徴の記載がないため、これらの記録はいずれの種か検証できない。したがって、四万十川産の標本は高知県からのマバラヒゲワラスボの確かな記録となる。

### 謝 辞

本報の執筆にあたり、東京都在住の太田啓佑氏には、ヒメハゼ属の一種の標本と写真を寄贈していただいた。香川県在住の難波拓登氏には、ミナミサルハゼ, シマサルハゼ, およびヒゲワラスボ属の採集情報を提供していただいた。株式会社相愛の高橋弘明氏には、文献の入手などにご助力いただいた。高知大学理工学部海洋生物学研究室の松永翼氏, 橘皆希氏らと卒業生の方々には、採集調査や標本作製などにご協力いただいた。高知大学理工学部の奈良正和教授には、軟X線撮影装置を貸与していただいた。Ichthy 編集委員の藤原恭司氏と匿名の査読者の方には、原稿に対し適切なご指摘をいただいた。以上の方々へ深く御礼申し上げます。

## 引用文献

- 赤池貴大. 2020. ヒメハゼ属の一種, p. 98. 本村浩之・山本智子・田金秀一郎(編) 鹿児島県北西部 不知火海にそそぐ 高尾野川河口周辺の生きものたち. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. [URL](#)
- 赤池貴大・藤原恭司・上原航知・松岡 翠・藤井琢磨・ジョンピョル・松本達也・中川龍一・緒方僚輝・是枝伶旺・古橋龍星・望月健太郎・飯野友香・出羽優風・石原祥太郎・本村浩之. 2021. 標本に基づく琉球列島初記録を含む沖永良部島初記録の魚類 66 種, およびサザンプラティフィッシュの島内における新産地とカワアナゴ属の一種の形態学的特徴. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 13: 18–35. [URL](#)
- 明仁・坂本勝一・池田祐二・藍澤正宏. 2013. ハゼ亜目, pp. 1347–1608, 2109–2211. 中坊徹次(編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 古橋龍星・是枝伶旺・赤池貴大・本村浩之. 2019. 鹿児島県薩摩半島南岸から得られたミナミサルハゼとカマヒレマツゲハゼの記録 (ハゼ科: サルハゼ属) および両種の生息環境に関する新知見. *Nature of Kagoshima*, 46: 81–87. [URL](#)
- 古橋龍星・是枝伶旺・本村浩之. 2020. 種子島初記録の準絶滅危惧ハゼ科魚類ヒゲワラスボ. *Nature of Kagoshima*, 46: 541–544. [URL](#)
- Fujiwara, K. and H. Motomura. 2020. An annotated checklist of marine and freshwater fishes of Kikai Island in the Amami Islands, Kagoshima, southern Japan, with 259 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 14: 1–73. [URL](#)
- 平田智法・山川 武・岩田明久・真鍋三郎・平松 亘・大西信弘. 1996. 高知県柏島の魚類相 行動と生態に関する記述を中心として. 高知大学海洋生物教育研究センター研究報告, 16: 1–177.
- 井上裕太・幸大二郎・溝脇一輝・山口 蓮・永江栞奈・内藤大河・富森祐樹・松沼瑞樹・遠藤広光. 2021. 高知市春野漁港内で新たに記録された四国初記録のズングリナガミズハゼ (ハゼ科) を含む魚類 51 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 10: 21–38. [URL](#)
- Iwata, A., K. Shibukawa and N. Ohnishi. 2007. Three new species of the shrimpassociated goby genus *Vanderhorstia* (Perciformes: Gobiidae: Gobiinae) from Japan, with re-descriptions of two related congeners. *Bulletin of the National Museum of Nature and Science, Series A, Supplement*, 1: 185–205. [URL](#)
- 蒲原稔治. 1931. 高知市附近の魚類. *動物学雑誌*, 43: 79–95. [URL](#)
- 蒲原稔治. 1950. 土佐及び紀州の魚類. 高知県文教協会, 高知. 368 pp.
- Kamohara, T. 1957. Notes on twenty additions to the marine fish fauna of Prov. Tosa, Japan, including one new genus (family Peristediidae). *Research Reports of the Kochi University*, 6: 1–6. [URL](#)
- 蒲原稔治. 1958. 浦戸湾内の魚類. 高知大学学術研究報告, 7: 1–11. [URL](#)
- Kamohara, T. 1958. A catalogue of fishes of Kochi Prefecture (Province Tosa), Japan. *Reports of the Usa Marine Biological Station*, 5: 1–76.
- 蒲原稔治. 1960. 高知県沖ノ島及びその付近の沿岸魚類. 高知大学学術研究報告, 9 (自然科学 I, 3): 15–30. [URL](#)
- 蒲原稔治. 1962. 高知県の淡水魚類について. 高知大学学術研究報告, 10 (自然科学 I, 2): 7–18. [URL](#)
- Kamohara, T. 1964. Revised catalogue of fishes of Kochi Prefecture, Japan. *Reports of the Usa Marine Biological Station*, 11: 1–99.
- 金川直幸・森口宏明・北原佳郎・渋川浩一. 2018. 菊川水系感潮域の魚類相 (予報). *東海自然誌*, 11: 21–43. [URL](#)
- 片山英里・遠藤広光・松野靖子・大河俊之・坂上治郎. 2017. 高知県から得られたハゼ科魚類 4 種の記録. *日本生物地理学会報*, 71: 189–198.
- 木村 翼・阿部航太郎・松本卓也・中村洋平. 2013. 高知県横浪林海実験所前の海底環境と魚類群集. *黒潮圏科学*, 6: 194–206. [URL](#)
- 高知県レッドデータブック [動物編] 編集委員会(編). 2002. 高知レッドデータブック [動物編]. 高知県文化環境部環境保全課, 高知. 470 pp.
- 国土交通省四国地方整備局 那賀川河川事務所. 2017. 第5回那賀川左岸堤防地震・津波対策事業環境回復モニタリング委員会資料. [URL](#)
- 是枝伶旺・古橋龍星・久木田直斗・本村浩之. 2022a. 薩摩半島から得られた九州初記録 10 種を含む, 鹿児島県本土初記録の暖水性魚類 16 種. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 17: 20–38. [URL](#)
- 是枝伶旺・古橋龍星・山下龍之丞・本村浩之. 2022b. 九州南部と屋久島から採集された分布南限を更新するナガミズハゼ種群未同定種 2 *Luciogobius* sp. 16 sensu Shibukawa et al. (2019) の記録. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 25: 13–26. [URL](#)
- 工藤孝治・山田和彦. 2005. 三浦半島南西部沿岸の魚類—VI. 神奈川自然誌資料, 26: 79–84. [URL](#)
- 國島大河. 2022. ヒゲワラスボ種群, p. 177. 和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室(編) 保全上重要なわかやまの自然—和歌山県レッドデータブック (2022年改訂版). 和歌山県環境生活部環境政策局環境生活総務課自然環境室, 和歌山. [URL](#)
- Maeda, K., N. Hanahara, M. Uehara and K. Tachihara. 2022. Larval study revealed diversity and life-history traits of crypto-benthic eel gobies. *Journal of Fish Biology*, 101: 1411–1427.
- 前田知範・平嶋健太郎. 2021. 和歌山県みなべ町埴田における 12 種のミミズハゼ属魚類の出現状況. *南紀生物*, 63: 35–38.
- Matsui, S., R. Inui and K. Yoshiaki. 2014. Annotated checklist of gobioid fishes (Perciformes, Gobioidae) from Wakasa Bay, Sea of Japan. *Bulletin of the Osaka Museum of Natural History*, 68: 1–25. [URL](#)
- 松井彰子. 2018. ハゼ科, p. 388. 中坊徹次(編) 小学館の図鑑 Z 日本魚類館 精緻な写真と詳しい解説. 小学館, 東京.
- 三宅崇智・佐竹直人・黒木広大・町田吉彦. 2006. 高知市浦戸湾南部に生息するハゼ科魚類. *四国自然史科学研究*, 3: 38–49. [URL](#)
- 森口宏明. 2010. 静岡県におけるミナミサルハゼの初記録. *南紀生物*, 52: 63–65.
- 本村浩之. 2009. 魚類標本の作製と管理マニュアル. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島. 70 pp. [URL](#)
- 本村浩之. 2023. 日本産魚類全種目録. これまでに記録された日本産魚類全種の現在の標準和名と学名. Online ver. 21. [URL](#)
- Motomura, H. 2023. An annotated checklist of marine and freshwater fishes from Tanega-shima and Mage-shima islands in the Osumi Islands, Kagoshima, southern Japan, with 536 new records. *Bulletin of the Kagoshima University Museum*, 20: 1–250. [URL](#)
- 村瀬敦直・緒方悠輝也・山崎裕太・三木涼平・和田正昭・瀬能 宏(編). 2021. 新・門川の魚図鑑: ひむかの海の魚たち. 宮崎大学農学部附属フィールド科学教育研究センター延岡フィールド, 延岡. 358 pp.
- 中坊徹次・町田吉彦・山岡耕作・西田清徳(編). 2001. 以布利黒潮の魚 ジンベエザメからマンボウまで. 海遊館, 大阪. 300 pp.
- 中坊徹次・中山耕至. 2013. 魚類概説第三版, pp. 3–30. 中坊徹次(編) 日本産魚類検索 全種の同定. 第3版. 東海大学出版会, 秦野.
- 野川悠一郎・遠藤広光・町田吉彦. 2003. 土佐湾初記録のハゼ科魚類. 高知大学海洋生物教育センター研究報告, 22: 37–51. [URL](#)
- 野元彰人・岸野 底・木邑聡美. 2005. 和歌山県串本町で採集されたサルハゼ属 (ハゼ科) の 2 種. *南紀生物*, 47: 26–28.
- 落合 明・寺岡 澄・半沢直人. 1980. 高知県における淡水魚の生息と分布の概況. 高知大学学術研究報告, 28 (農学): 147–156. [URL](#)
- 岡本沙知・遠藤広光. 2007. 四国初記録のキマダラハゼ *Astrabe flavimaculata* とシロクラハゼ属 (*Astrabe*) の分布 (スズキ目ハゼ科). *四国自然史科学研究*, 4: 57–61. [URL](#)
- 岡村恭平・津野義大・富山陽聖・遠藤広光. 2023. 高知県大月町から得られた北限を含む四国初記録の南方系通し回遊魚 4 種 (タニヨウジ, セスジカサゴイシモチ, タネカワハゼ, アカボウズハゼ). *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 29: 1–8. [URL](#)
- 岡村恭平・津野義大・富山陽聖・遠藤広光. 2022. 高知県初記録のカマヒレマツゲハゼ. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 27: 7–10. [URL](#)
- 岡村恭平・斉藤知己. 2023. 高知県大月町の河川から得られた四国初記録のオニヌマエビ. *四国自然史科学研究*, 16: 30–32. [URL](#)
- 大塚高雄・野村彩恵・杉村光俊. 2010. 四万十川の魚図鑑. いかだ社, 東京. 163 pp.
- 斉藤洪成・難波拓登. 2022. 愛媛県から得られたナガミズハゼ種群未同定種 2. 南予生物フィールドノート, 2022: 22019. [URL](#)

- 瀬能 宏・鈴木寿之・渋川浩一・矢野維幾. 2021. 新版 日本のハゼ. 新訂・増補版. 平凡社, 東京. 588 pp.
- Shibukawa, K. and E. O. Murdy. 2012. A redescription of the eel goby *Trypauchenopsis* (Gobiidae: Amblyopinae) with comments on relationships. *Copeia*, 2012: 527–534.
- 渋川浩一・武藤文人・鈴木寿之・藍澤正宏. 2017. 浜名湖から得られたハゼ科サルハゼ属の1未記載種と日本産同属魚類の分類の現状. *東海自然誌*, 10: 45–57. [URL](#)
- 渋川浩一・藍澤正宏・鈴木寿之・金川直幸・武藤文人. 2019. 静岡県産ミミズハゼ属魚類の分類学的検討 (予報). *東海自然誌*, 12: 29–96. [URL](#)
- 鈴木寿之. 2014. シジミハゼ, p. 497. 本村浩之・松浦啓一 (編) 奄美群島最南端の島 与論島の魚類. 鹿児島大学総合研究博物館, 鹿児島・国立科学博物館, つくば. [URL](#)
- 山川宇宙・坪 健人・酒井 卓・三井翔太・瀬能 宏. 2017. 相模湾とその周辺地域の河川および沿岸域で記録された注目すべき魚類5種. *神奈川自然誌資料*, 38: 77–82. [URL](#)
- 山川宇宙・三井翔太・丸山智明・加藤柊也・酒井 卓・瀬能 宏. 2018. 相模湾とその周辺地域の河川および沿岸域で記録された注目すべき魚類18種—近年における暖水性魚類の北上傾向について—. *神奈川県立博物館研究報告 (自然科学)*, 47: 35–57. [URL](#)
- 山下龍之丞・尾山大知・碧木健人・鎗田めぐ・山川宇宙. 2022. 関東地方沿岸におけるヒゲワラスボおよびコガネチワラスボの記録: 2種の出現記録の増加傾向とその要因. *Ichthy, Natural History of Fishes of Japan*, 20: 1–12. [URL](#)
- 吉郷英範. 2014. 琉球列島産淡水性魚類相および文献目録, *Fauna Ryukyuana*, 9: 1–153. [URL](#)